

JLEM 第 55 回研究会参加者募集について

JLEM 会員の皆様へ

事務局の中川です。本日は、9月12日(土)にオンライン開催する第55回研究会について以下の1)~3)のお知らせがあり、ご連絡いたしました。

1)ポスター発表について

先日お知らせしましたように、9月12日に静岡大学で開催予定だった第55回研究会はオンライン開催とし、新規の発表は募集せず、中止となった第54回研究会の発表者から発表希望者を募りました。その結果6件のポスター発表が実施されることとなりました。開催スケジュール、発表の概要については次ページ以降をご参照ください。なお、今回は新規の発表が行われないことから、研究会誌は発行いたしませんので、発表内容の詳細については第54回研究会誌をご参照ください。

2)特別企画について

コロナ禍によって、今年度オンラインでの日本語の授業を経験した方も多くいらっしゃるかと存じます。そうした現状を踏まえ、第55回研究会では、「オンライン授業を振り返る」という特別企画を行うことになりました。今回の特別企画は、2020年前期を振り返り、この半年間を通じて得た実践的な知識や経験を共有する場としたいと思います。ソフトウェアや機器の使い方からオンライン授業における評価といった大きな課題まで、会員の皆様から寄せられたトピックを中心に経験・知識を共有する場としたいと思います。皆様の参加をお待ちしております。

3)参加申込について

第55回研究会では、運営上の都合により参加者の上限を70名といたします。参加ご希望の方は以下のリンクより9月7日(月)24時までに参加申込をお願いいたします。先着受付で、申込者が上限に達した時点で申込受付を締め切りますので、ご注意ください。なお、今回の研究会は会員、非会員いずれも当日参加はできません。

<https://ssl.form-mailer.jp/fms/6746243f674648>

参加申込フォームには、上記2)の特別企画に関するアンケートが含まれていますので、ご協力をお願いいたします。

以上、よろしくお願いたします。



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 55 回 日本語教育方法研究会

オンライン開催

2020 年 9 月 12 日 (土)

2 月 25 日にお知らせしたように、9 月 12 日 (土) に静岡大学で予定されていた第 55 回研究会は、新型コロナウイルス感染症の情勢を鑑みてオンライン開催といたします。

会長 河野俊之

開催スケジュール

13:00-13:10 開会式

13:10-14:05 特別企画「オンライン授業をふりかえる」意見交換会

14:15-15:20 ポスター発表第一セッション+特別企画雑談会

発表①「日本語レベル差がある留学生クラスにおける授業のユニバーサルデザイン化の試み」横山りえこ (愛知県立大学)

発表②「日本語教員が担う管理運営業務のロードマップ作成の試み」平山允子 (日本学生支援機構)・浦由実 (アン・ランゲージ・スクール)

発表③「中国人理工系留学生の数学講義動画視聴における困難点 — 数学的要因を中心に —」滝口浩由 (フリーランス)

15:25-16:30 ポスター発表第二セッション+特別企画雑談会

発表④「中級・上級レベル向け実用的テンス・アスペクト教材開発」堀恵子 (東洋大学)

発表⑤「直感的文脈における「いい人そうだ」の選択率—日本語母語話者と上級学習者を比較して—」宮口徹也 (中部学院大学)

発表⑥「母語の異なる学習者が混在する日本語クラスにおける通訳練習の導入」渡邊知積 (群馬大学)

16:30-17:15 交流会

17:15-17:30 閉会式

*こちらのタイムテーブルについては変更の可能性がありますので、ご了承ください。

発表概要

14:15-15:20 ポスター発表第一セッション

発表①「日本語レベル差がある留学生クラスにおける授業のユニバーサルデザイン化の試み」

横山りえこ（愛知県立大学）

障害有無問わず、誰もが学びやすい環境を整える『授業のユニバーサルデザイン(以下、UD)化』は、特別な支援を必要としない者に対する学習指導にも効果的で学力向上につながるとされている。近年日本語学習者の多様化が進む日本語教育において教師はこれまで以上に授業の工夫が求められているが、この授業のUD化は日本語レベルに差があるクラスにおいても有効に作用するのだろうか。そこで筆者は JLPT の N4 から N1 合格者が混在する日本語レベルに差がある留学生クラスにおいて、授業のUD化を試みた。本稿では授業のUD化具体策と気づきを授業記録を基にまとめ、学びやすさを含む授業の感想を留学生アンケートから報告する。

発表②「日本語教員が担う管理運営業務のロードマップ作成の試み」

平山允子（日本学生支援機構）・浦由実（アン・ランゲージ・スクール）

日本語教員は、所属機関で、授業以外にも、学生対応や時間割作成等の様々な管理運営業務を担っている。管理運営業務については、養成段階で学ぶ機会ほとんどないため、新任教員は、知識や経験がほぼない状態でそれらの業務を担当することになり試行錯誤を繰り返すことが多いのではないだろうか。機関の目的や規模により、教員が担う管理運営業務にも違いがあるが、日本語教員のキャリア形成の上で、自分が今後どのように管理運営業務に関わっていくのかという見通しは必要不可欠である。本研究では、先行研究で行った調査の結果を基に、日本語教員がどの段階でどのような管理運営業務に関わり始めるべきかというロードマップの試案を作成した。

発表③「中国人理工系留学生の数学講義動画視聴における困難点 —数学的要因を中心に—」

滝口浩由（フリーランス）

日本の大学（学部）での教育の中心は講義であり、外国人留学生にはそれを理解するだけの日本語能力が求められる。理工系留学生の場合、必須である数学講義に慣れておくことが有効であろう。しかし、入学前にそれを身に付けられる環境にある留学生は限られている。そこで筆者は数学講義動画作成を前提とし、学部入学前の理工系留学生が日本人学生向けの数学講義動画を視聴した際に生じる困難点を調査した。その結果、数学的要因による困難点として（Ⅰ）「講師の説明による困難点」（Ⅱ）「講師の板書による困難点」（Ⅲ）「協力者の数学的観点・思考パターンによる困難点」（Ⅳ）「協力者の数学的知識による困難点」（Ⅴ）「観察者の数式口頭表現による困難点」の5点があることが明らかになった。

15:25-16:30 ポスター発表第二セッション

発表④「中級・上級レベル向け実用的テンス・アスペクト教材開発」

堀恵子（東洋大学）

発表者らは、中級・上級レベルの学習者と日本語教育関係者を対象に、テンス・アスペクトに関する知識を整理できる教材を開発中である。テンス・アスペクトについて取り上げた項目は、「テイル」が表す動作継続、結果状態、習慣・繰り返し、単純状態、効力持続など文法現象に焦点を当てたものだけでなく、配慮表現としての「テイル」なども取り上げている。これは、学習者が日本語を使用して円滑な人間関係を築くことができるようになることを目的とするからである。また、文法用語などは最低限に抑え学びやすくし、用例や問題文はコーパスからヒントを得て作成するなど、学習者が実際に使用する話題、場面などに配慮している。

発表⑤

「直感的文脈における「いい人そうだ」の選択率—日本語母語話者と上級学習者を比較して—」

宮口徹也（中部学院大学）

様態のソウダには「あの人はいい人そうだ」のように名詞に接続する用例も確認される。これは誤用とされることがあるが、証拠性判断を表す他のモダリティ形式（ヨウダ、ミタイダ、ラシイ）にはソウダのような直感的意味合いがなく、「いい人そうだ」を他の形式で言い換えるのは不可能である。そこで本研究では、直感的に「いい人だろう」と判断する文脈において、実際にどの形式が選択されるのか、日本語母語話者・上級学習者を対象にアンケート調査を行った。その結果、母語話者ではソウダの選択率が圧倒的に高く、「いい人そうだ」が確立した表現であることが確認された。一方で学習者ではソウダの選択がほとんどなく、同表現が学習者には認知されていない可能性が示唆された。

発表⑥「母語の異なる学習者が混在する日本語クラスにおける通訳練習の導入」

渡邊知積（群馬大学）

学習途上の言語使用者によるインフォーマルな通訳は、例えばCEFR補遺版においてはそれに該当するCan-do記述が「仲介」能力の一部として定義されているように、一定の学習ニーズがあるものと思われる。一方、国内の日本語教育においては、母語の異なる学習者が1つのクラスに混在する等の事情により、学習対象である日本語のみがタスクやプラクティスにおいて使用されることが一般的で、通訳が扱われることは稀である。本研究では、大学中上級レベル日本語クラスにおいて、母語の異なる参加者を対象に、それぞれの母語によるスピーチを日本語に訳出する練習を導入した実践と、その参加者による評価について考察する。